朝、あわてて身じたくを整えている有希の部屋の襖が乱暴に叩かれた。

「ちったん、ちょっといい?　開けるわよ」

(お姉ちゃんだ。とうとうあれがバレたのに違いない)

「い、いいけど……」

隠れようにこの部屋で隠れるところはどこにもない。しょうがなく、まるで命綱のようにクッションを抱きしめて、有希は襖が開く瞬間を待った。

ガターン!

クッション越しにおそるおそる目を上げた。あんのじょう、怒りで仁王立ちになった姉の由佳里がそこにいた。

「私の戸川純のテープ、あれどういうこと?」

中学3年の由佳里はロックに目覚め、洋楽・邦楽問わず、ニューウェーブ系のものを毎日溺れるように聞いていた。みんなと遊ばなくなってからひとりでレコードを聞いたり、マンガを描いたりすることがふえていた有希は、由佳里のレコードやテープを借りて聞くことがよくあった。だが、最近になってカセットで録音することを覚え、ついうっかり戸川純のテープに自分の歌を吹き込んでしまったのである。

「ごめん、カラのテープと違っちゃった」

「ごめんじゃないわよ。あれ、友達からわざわざダビングさせてもらったんだからね。レコードがないんだから、もう録音できないのよ。どうしてくれるの?」

「私、誰かから借りてくるよ」

「誰かからって、あんたの友達に戸川純のレコード持ってる子なんているわけないじゃない」

言われてみれば、そのとおりだった。小学6年生でロックを、ましてカルトな戸川純を聞いている子はそうはいなかった。

「どうしよう……」

「どうしようって言われたって、私も困るもん。とにかくなんとかしてよね。あれ大好きだったんだから。なんでその代わりに、あんたの下手くそな歌なんか聞かなきゃいけないのよ」

怒りのおさまらない様子で由佳里は部屋を出ていった。

レコードを買うには2800円必要だ。有希は机の上の貯金箱を揺さぶってみた。だが、カラカラと音をたてるのは、百円玉や十円玉だけだった。

暗い気持ちになって、ベッドに突っ伏した。

(なんておっちょこちょいなんだろう。ちゃんとテープを聞きなおしておけば、こんなことにならなかったのに。あーあ、録音なんかするんじゃなかった……)

はじめてカセットテープに吹き込んだ自分の声を聞いたとき、有希は本当にびっくりした。カセットデッキから流れてくるそれは、自分の声ではない気がした。でも、それが不思議におもしろく、何度も何度も繰り返し聞いた。そのうち自分で作った歌を録音するのが楽しみになっていた。歌のは大好きだった。それが機械から流れてくると、歌手になった錯覚さえ覚えた。そのときだけは嫌なことも忘れられた。

(母さんに相談しよう)

めずらしく早く結論が出て、有希は台所に向かった。

有希の話を聞くと、亮子は財布から五千円札を取り出して言った。

「これで買って返しなさい」

「いいの?」

「間違って吹き込んだのはしょうがないじゃない。カラのテープがないんだったら、それで何本か買ってもいいから」

「ありがとう」

泣きついた夜以来、妙に優しい母親に、有希は心から感謝した。

「宿題をする」と言って部屋に戻ったのに、漏れ聞こえてくるのは姉妹で毎週土曜日にやっているDJごっこの声だ。

「有希と由佳里の!」

「サタデーナイトー!」

「ワーッ」

パチパチパチと拍手の音――。

「今夜のオープニングナンバーは、チェッカーズの『ギザギザハートの子守歌』、では行ってみましょー!」

聞こえてくるロックのリズムに半分耳を押さえながらも、亮子は内心喜んでいた。いじめにあうようになってからどんどん内向的になっていた有希が大声でしゃべたり、歌をうたったりしているのを聞くと、少しだけ安心した。

メインDJは有希で、選曲のほとんどを手がけていた。文学少女の由佳里は、自分で書いた詩の朗読やラジオドラマのシナリオ担当。毎週土曜日の生番組『有希と由佳里のサタデーナイト』に姉妹ふたりは夢中になっていた。

「今度からリスナーからのハガキも書いて読まない?」

「ゲストを呼んでもおもしろいんじゃないかな」

顔を会わせれば、次々アイデアを出し合った。回数を重ねるごとに、番組はバラエティ豊かなものになっていく。

「さあ、みなさんお待ちかね。次のコーナーは有希と由佳里のカラオケライブです。今日はふたりの得意のナンバーで、ピンクレディー『ペッパー警部』をお届けしましょー」

「イェーイ!」

「せーのっ」

「♪ペッパー、警部～」

「ヒュー!」

声援を送るのは弟の民教だ。たったひとりのリスナーを前に、ふたりは畳の上で振付も完璧に『ペッパー警部』を歌い踊る。

見えないマイクを手にした、有希は歌う。

歌っているときの有希は、ようやく自分を取り戻した気持ちになれた。どこまでも自由で、どんなふうに自分を表現しようと、誰にも何も言われない。絵を描くのも楽しかったけれど、歌にはそれを超える解放感があった。

お腹に力を入れて、大きく口を開けて歌う。

そうすると、自分はきちんと息をしている、きちんと生きているんだと確信できた。 夜がふけでも、飽きることなく歌いつづけるふたりだった。